

部屋と編集と私

高知大学医学部外科 講師
ACRT 編集員長

前田 広道

『Annals of Cancer Research and Therapy』(ACRT) は日本癌病態治療研究会が発行する英文雑誌で、30年以上継続しております。歴史のある雑誌です。そのような貴重な雑誌の編集長に2021年理事会にて大抜擢いただいてから、ACRTと私の不安な大航海は1年になろうとしています。今更ですが、自分が浅はかであったと感じることは、ACRTは癌に関係するあらゆる分野からのご投稿を受け付けており、普段専門とする領域以外の臨床研究はもちろんのこと、動物、細胞実験が主体となる基礎研究の査読もあることです。今や査読から結果の通知にかかる期間は、以前の面影もなく伸長し、ひと月を超えることも多くございます。それでも、何とか1年間継続できたのは、ひとえにご支援を頂きました関係者の皆様のおかげとこの場をもって心より感謝を申し上げます。特に、ACRTの発刊を陰でささえてくれている(私からすると、陰どころか、偉大な管理者なのですが) ムーンドッグの永田様、辛抱強くご指導をいただいております前編集長の柴田先生や、理事長の松原先生、忙しい合間にボランティア精神で投稿論文へのコメントを頂き、論文の質を高めてくださっている査読者の皆様にはどのようにお礼を申し上げるべきか、言葉も見つかりません。

さて、国家の科学技術力の低下に対し危機感をもった日本政府はさまざまな取り組みを始めていますが(例えば10兆円ファンド; もちろん地方大学にはおこぼれはありません)、自らを科学者と呼びコミュニティの末端構成員であろうとする私としては、「この歴史ある英文雑誌が世界的にも認知されて、世界中から優れた投稿が来るような状態にする」ことこそが使命だと意気込んで帆を広げたのでした。しかし、現実には甘くありません。前述のごとく、領域横断的な投稿内容は査読スピードを低下させ、そうこうしているうちに別のご投稿を頂き、焦燥感に駆られているうちに日は暮れ就寝時間が来てしまう……。けれどもそのたびに、絶妙なタイミングで査読者の心温まる、時に科学的には妥協のないコメントに励まされ、何とか査読作業を終える。そんなことを繰り返す1年でした。このように全身全霊、一生懸命に査読を継続しているのですが、投稿者からは査読に対する返答が返ってこない時もありますし、礼儀正しく withdrawal のメールが来ることもあります。何らかの事情があるのだとは思いますが、寂しい気持ちになりながら、あの査読の書き方(結果の通知)はあれでよかったかと思いついたりもします。

2020年、ACRTは理事長でいらっしゃいます松原先生と前編集員長の柴田先生の強力なリーダーシップのもと、PubMedCentral (PMC) 取載に向けての事業が大幅に進められました。財務についても、ご準備を進めていただきました。現在は、明らかとなった残りの問題点の克服に向けて活動継続中です。2021年末には柴田先生がご準備されていた Similarity check を実行に移し利用するようにいたしました。今後、テスト期間を終了してすべてのご投稿に対してスクリーニングを掛けるようにいたします。これは1件あたり1ドル未満で利用できるとても有用なサービスで、若者言葉で‘チートアイテム’に相当します。剽窃の危険が大幅に減少しますので、雑誌としても安心感につながります。それに合わせて、投稿規定や投稿時添付書類を改訂しました。投稿内容の精度を上げてもらう目的もあり、倫理規定やCOIなど別ファイルで投稿論文に添付いただくようにしました。これもまだ利用率が十分ではありませんが、有効性が少しずつ実感できていますので、全投稿において実行できるようにしていきたいと思っております。

A CRTに関連した今後の計画ですが、まず英語専用サイトを立ち上げたいと考えて

います。これによって、投稿者を正しい場所に誘導して author guideline などにアクセスしやすくなると考えています。また、年間の投稿数と査読数が40編を超え始めました。安定的に超えますとJ-Stageが投稿システム利用の補助をさせていただきますので、ぜひ応募したいと考えています。そして、できましたら同時進行で査読者の増加(登録)を目指したいと考えています。現在、査読作業の大部分はBoard memberのボランティア活動によって成り立っていますが、雑誌の知名度を上げつつ、査読に関わってくださる方(外部査読者)を募っていき、スムーズで正確な査読を実現できればと願っています。その前に、編集長を解任されているかもしれませんが、この場を借りて自己アピールと意気込みの表明をさせていただきます。今後とも、全集中で頑張りますのでPMC取載に向けた活動を引き続き支えていただければ幸いです。



本日は、高知県の山奥にある医療機関で当直を行っています。当直室は広くて清潔です。病棟と呼ばれることも少なく、研究活動、教育活動の準備を進めるにはうってつけの当直でございます。写真はそばを流れる、高知



仁淀ブルーと呼ばれています。筆者、初夏に撮影。

県民の間では有名な川です。小鳥の鳴き声が聞こえる程度の絶妙に静かな環境です。しばし病棟・外来の気ぜわしさ、手術の緊張感からは距離を置いて、査読作業や自分自身の論文執筆、時には授業の資料を作成することがなんと贅沢な時間であるかと思えます。一方でこの時間が永遠であるのは苦痛な気もします。ネズミが歓迎してくれる世界的な遊園地や、鳥取県には最近までなかった（すいません、同じ地方ということで許してください）コーヒー好きの航海士がモチーフになった星のついたコーヒー屋さんも良いのですがあまり長くはられません。特に私の大好きなコーヒーであっても、二杯目からは贅沢のし過ぎで動悸がします。

現時点での ACRT に関わる私自身の大目標は PMC への取載でございます。これによって知名度が上がり、投稿、収益なども安定するものと思います。資金を必要とするチャレンジですので失敗は避けたいですが、挑戦しなかった後悔も味わいたくないジレンマに悩みが尽きません。大航海のつもりが、自堕落なのに楽園に長くはられない性格の狭間に、波打ち際の流木のようにゆらりゆらりとしています。それでもなお、ACRT をさらなる高みに押し上げるべく努力してまいりますので、引き続き、どうかご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

いつもを、いつまでも。

あたり前のようにつづく毎日ほど、

かけがえのないものはない。


私たちは、“いつも”を支える力になりたい。

大切な“いつも”が失われた時、

強く取り戻す力を届けたい。

いつもを、いつまでも。

私たち大鵬薬品ひとりひとりの願いです。

 大鵬薬品

